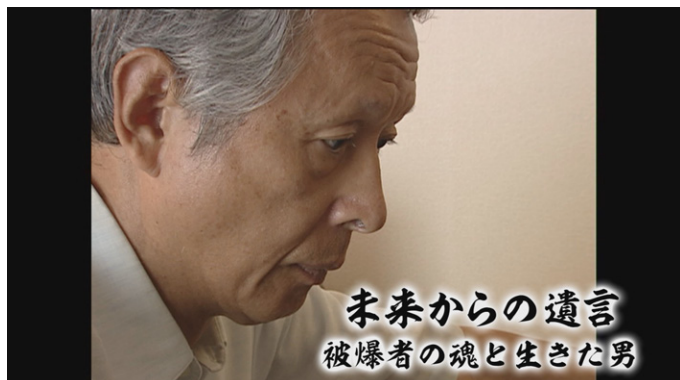




長崎ケーブルメディア

[2026/01/08放送]

未来からの遺言 被爆者の魂と生きた男

◎プロデューサー／斉藤 礼子

◎ディレクター／斉藤 礼子

[42分]

●制作意図

一昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、去年は被爆80周年を迎え私たちは平和への願いを新たにしました。その一方でウクライナやイランの戦禍は続き核兵器の脅威は高止まりしたままです。そんな中、たった1人で被爆者の声を集めた伊藤明彦さんの生き方に光が当たりました。伊藤さんがかつて描いた未来が実現することがないよう、その祈りを込めて番組を制作しました。

●あらすじ

2009年に72歳で亡くなった伊藤明彦さん。伊藤さんはアルバイトをしながら生活費や取材費を工面し、自費で1000人を超える被爆者の証言を集めました。安定していた放送局を退職してまで伊藤さんが取り組み、遺したものを、伊藤さんを知る人の証言や生前の著作を元に描きました。



大垣ケーブルテレビ

[2026/06/12放送]

写し、つなぐ ～百年先へつなぐ頭～

◎プロデューサー／黒木 幹大

◎ディレクター／黒木 幹大

[45分]

●制作意図

7年前、からくり人形師・後藤大秀さんの取材をきっかけに、弟子の山口寛さんと出会いました。後藤さんの最後の仕事を追った際、山口さんが悩みながら師匠の仕事を完成へ導く姿を記録していました。以来、地域に根ざすメディアとして7年間にわたり関係を築き続け、今回、およそ80年ぶりとなる鯰やま人形の復元新調取材しました。師匠から受け継いだ「写し」の技術と、元会社員ならではの記録による技術継承。その姿を通して、伝統を未来へ残すために必要な継承のあり方と、地域に新たな職人が誕生する瞬間を描きました。

●あらすじ

「同じ顔にしてほしい」――。
70年以上、大垣まつりで親しまれてきた鯰やまのお爺さんの顔。その復元を託されたのは、亡き人形師・後藤大秀の弟子、山口寛。
能面の“写し”の技を頼りに、表情や肌の質感、そこに宿る記憶までも写そうとする。
技術を受け継ぐことは、過去をなぞることではない。師匠から託された技と、町から託された思いを胸に、ひとりの弟子がからくり人形師として歩み出す。
写し、つなぐ。頭に宿る記憶を百年先へ。その姿を見つめた。



ぴ〜ふる

[2026/03/31放送]

わたしたちはまだ知らない 変わりゆく海の楽園

◎プロデューサー／田中 直也

◎ディレクター／田中 直也

[31分]

●制作意図

2023年から唐津・玄界灘の海中世界をシリーズで紹介する番組を制作。取材するなかで温暖化の影響で海の風景が変わっていることを知り、その異変を視聴者に伝えたいと番組を企画。浪口さんの協力を得ながら変わりゆく海の姿を撮影したほか海に対峙する漁師の取り組みとも思いも伝えました。温暖化による海の環境変化は地球的規模の問題。その中で唐津・玄界灘はどう変化しているのか、取材者側の視点、海で生きる人間たちの視点で描写しています。

放送後、地元の視聴者から海の変化にどう向き合っていくか考えさせられたと感想をいただき、未来のためにこの海とどう関わっていかなければいけないのか映像を通して感じていただいた。

●あらすじ

青い海が広がる玄界灘。わたしたちが普段目にすることができない海の中は異変が起きています。温暖化の影響で磯焼けが進む七ツ釜、沖縄を思わせるようなサンゴの楽園に変わった馬渡島の海域、熱帯魚の群生、色鮮やかな海はダイバーにとっては天国ですが、海を生業にする漁師たちにとっては深刻です。

番組は陸上から見ることでできない唐津の海の中が想像とは違う世界に変わっているという事実をダイビングの映像やインタビューを通して伝えています。さらに海で起きている異変を伝えるとともに、海の変化に翻弄されながらも解決の糸口を探ろうとする屋形石漁業の漁師たち姿を追っています。



日本ネットワークサービス

[2026/03/21放送]

ひらけ！可能性のひきだし ～障がい児を照らす パワフルなーさん～

◎プロデューサー／伊藤 太一

◎ディレクター／伊藤 太一

[43分]

●制作意図

最も伝えたいことは、「無知は時として人を傷つける」という事です。
相手が障がい者(児)だと分かった途端に差別をする人が現実にあります。
しかし正面から向き合ってみれば、障がい児もその家族も健常者と何ら変わらない
“普通の人たち”です。確かに配慮やサポートは必要ですが、楽しい事があれば
笑うし、嫌な事があれば落ち込みます。その事実を知らないまま、障がい者のことを
「異質なもの」「怖い存在」と捉えている人がまだまだ多いのが現状です。
この番組の主人公、永井由香さんは、自身のサークルでの活動を通じ
「健常児も障がい児もみんな一緒の子ども」と訴えています。
その願いが一人でも多くの方に届いてほしいと思います。

●あらすじ

子ども達の「出来るのひきだし」をもっと増やしたいと奮闘する女性がいます。
療育に特化した親子遊びサークル「なーさんのひきだし」を主宰する永井由香さん。
重症心身障害児やその家族などが安心できる居場所を作るため、ボランティアで
おせいさくの教室や公園遊び、お泊りイベントの開催など様々な活動をしています。
差別や偏見をなくし、誰もが分け隔てなく共存できるインクルーシブな社会の実現を
目指す“パワフルなーさん”の1年を追いました。



CCNet

[2026/03/28放送]

永久に語り継ぐ 豊川に響く声のリレー

◎プロデューサー／鈴木 順一郎

◎ディレクター／橋本 真由美

[58分]

●制作意図

語り継ぐ活動に長年向き合ってきた先輩メンバーと、
未来へ受け継ごうとする若い世代の決意。

そして、空襲体験者から託された思いと、平和への強い願い。
その三つが“声”でリレーのようにつながる姿を描きました。

過去の記憶を未来へつなぐことの意味を、番組を通じて、
視聴者の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

●あらすじ

1945年8月7日、豊川海軍工廠への空襲では
2500人以上の人生が奪われました。

生き延びた人々は、その苦しみや願いを胸に、
語り部として“声”を紡ぎ続けてきました。

しかし、語り部が少なくなりつつある今。その証言を未来へと残そうと、“声”に
こだわり、「朗読」で語り継ぐボランティアたちがいます。

戦後80年の夏。大学生のボランティアが、93歳の空襲体験者と出会い、
新たな朗読原稿づくりに挑みました。

語り継ぎの先輩たちとともに歩む、“声”のリレーの物語です。



伊那ケーブルテレビジョン

[2025/08/01放送]

陸軍登戸研究所 ～本土決戦に備えて～

◎プロデューサー／平山 直子

◎ディレクター／平山 直子

[29分]

●制作意図

太平洋戦争末期の1945年・昭和20年3月、神奈川県川崎市登戸から、上伊那地域に、日本の秘密・謀略機関 陸軍登戸研究所が疎開した。研究の他、学徒動員した生徒によって爆弾の製造などが行われていた。長野県に疎開してきた理由が近年の研究により明らかになってきている。それは、松代大本営を中枢とする本土決戦に備えるためだった。

●あらすじ

2025年は、戦後80年。上伊那地域の戦争を語る上で、登戸研究所については避けて通れないだろうと考えた。取材を進める中で、大本営がどのような構想を持っていたのかが浮かび上がり、背筋が寒くなるような思いがした。一人一人の命がただの駒として扱われていた一億玉砕の発想。本土決戦の準備が、この上伊那地域で着々と進められていた。

登戸研究所は秘密・謀略機関の為、資料は戦後直後に焼却され、謎に包まれているが地元の研究者により、少しずつその姿が明らかになっている。

戦後に撮影された米兵と一緒に映る地元住民の笑顔の写真に強い違和感を感じた。当時のような事態が二度と起きないように警鐘の意味を含ませたいと思い制作した。



J:COM

[2026/05/16放送]

熊谷桜、気仙沼へ ～幻の花を伝える人～

◎プロデューサー／佐藤 大祐

◎ディレクター／塚越 誠治

[25分]

●制作意図

本作は、地元から消えた「熊谷桜」の復活を通して、地域と地域、人と人を結び直す“記憶の継承”を描くことを制作意図とした。震災復興の象徴として語られてきた千本植樹の成果だけでなく、そこに至るまでの長年の交流に光を当てることで、表層的な美談ではなく、継続する意思の重みを伝えることを目指した。熊谷ケーブルテレビ時代から約30年蓄積されたアーカイブ映像と現在の取材を重ね、時間の厚みを映像として可視化するとともに、市民一人ひとりの思いを丁寧に拾い上げ、「地域メディアにしかできない記録性と当事者性」を提示することを強く意識した。

●あらすじ

埼玉県熊谷市で一度は姿を消した「熊谷桜」。その復活に取り組んだ横田透さんは、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市で、桜を通じた交流をグループの中心となって始める。歴史的な縁で結ばれていた両市は、市民同士のつながりを深めながら10年かけて千本の植樹を実現。本作は、幻の桜の再生と震災復興を重ね合わせ、人々の思いと絆が育まれていく過程を描くドキュメンタリーである。



伊万里ケーブルテレビジョン

[2026/01/02放送]

家事と育児とたまごとおかし ーからだにいいもの、 届けたいー

◎プロデューサー／大野 梨花

◎ディレクター／大野 梨花

[37分]

●制作意図

弊社では、6年前のsueco創業時にも農園のドキュメンタリーを制作しています。今回は第2弾です。松本美和さん本人からの持ち込み企画で、その熱意と、若者が地域を盛り上げようと奮闘する姿は「地域振興のモデルケース」になり得ると確信し、制作に着手しました。単なる成功談ではなく、若手農家のリアルな葛藤を通じて、地域の未来を描き出すことを目的に制作に取り組みました。

●あらすじ

佐賀県伊万里市の養鶏農家(株)suecoの松本美和さん(30歳)は、家事・育児に追われる日々の中、規格外の卵を使ったスイーツを佐賀の銘菓にしようと目標を立てました。知識や経験のない彼女は県の支援を受けて、福岡での大規模商談会への出品が決まります。商談会に向け、パッケージ刷新や新味開発に奔走し、“売れる商品”にするべく奮闘する姿を1年半にわたり追いました。若き女性農家の情熱と再生の地域振興ドキュメンタリーです。



広域高速ネット二九六

[2025/08/18放送]

ドカンに震えたまち ～九十九里と 米軍基地の10年～

◎プロデューサー／藤本 健太郎

◎ディレクター／萩谷 智弘

[30分]

●制作意図

この番組を制作する10年前「千葉で起こるかもしれない本土決戦」に着目し取材を進めていた。その過程で終戦の3年後に上陸予定地からほど近い九十九里浜の海岸に米軍が高射砲の演習場を作ったことを知った。この取材をきっかけに山武地域で起きた戦争の事実が掘り起こされ、これまで4本番組を制作したが、戦後80年の節目に「戦後の地域」に焦点を当て、痛みと教訓を浮き彫りにしようと今回の番組を企画。

放送後、山武市から依頼を受け、市民向けに番組の上映会が開かれた。来場者からは「基地の存在を初めて知り、ショックを受けた」、「生きている限り戦後は終わっていないという地元民の言葉がとても重い」といった言葉をいただいた。

●あらすじ

約70年前、米軍基地が千葉県にも存在していた。太平洋戦争の末期、米軍は九十九里浜からの上陸を計画していた。本土決戦は幻となったが、終戦から3年後、九十九里浜(現在の九十九里町)に米軍基地「キャンプ・カタカイ」が建設された。砂浜には高射砲が設置され爆音が町に響き渡った。

住民たちは高射砲の演習を爆音にちなんで「ドカン」と呼んだ。漁業は大きく制限され漁民の生活は困窮した。そして死者を出す事故も多発。町の風紀も乱れた。

当時を知る住人や基地内で働いていた人の証言、郷土史家による調査、基地内の様子をおさめた写真や近年発見された資料などから戦後の九十九里で起きた苦闘の10年に迫る。